

「男、突っ走る！」

第54回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (21) 名古屋芸術専門学校3年生

木内 真保 (48) 雅也の母

福本 瑞枝 (21) 名古屋芸術専門学校3年生  
植野 雪奈 (21) 名古屋芸術専門学校3年生

安本 真苗 (56) 『スクエア・トラスト』代表取締役社長

雅也と真苗が話している。

真苗「学校と連携すれば、いろいろ可能性が  
広がるわね」

雅也「ただ、いくらフリーペーパーとはいえ、  
いち企業の看板を背負って作ることになり  
ます。その発行物を、まだ社会人にもなっ  
ていない僕が、制作業務全般を行って良い  
ものかとも考えます」

真苗「そこまで考えてたのね」

雅也「もちろんです。『なご弁新聞』の連載  
に携わらせていただいていることは、本当  
にありがたい話で、自分の中でも良い実績  
になっています。ですが、まだ半年も経っ  
てないのに、上手くできるかどうか」

真苗「大丈夫よ。堀内先生にも、監修という  
形でバックアップはお願いしてあるんだも  
の」

雅也「もちろん、先生方のお力添えをいただ  
けるのなら、これほど心強いことはない

のですが」

真苗「何か、不安なことでもあるの？」

雅也「プレッシャーと言いますか……荷が重  
いような気がして。企業が発行する紙媒体  
を、学生が作るということが……」

真苗「なるほどね。まあ、気持ちは分からな  
くもないわ。確かに、学校との連携を事務  
局にもお願いしているとはいえ、木内君が  
トップに立つとなると、プレッシャーを感  
じるのは無理もない話よね」

雅也「……あ」

真苗「どうしたの？」

雅也「社長。その学校の連携って、他の大学  
とかでもできますか？」

真苗「そりゃうちは、就活イベントやインタ  
ーンのマッチングイベントもやってるから、  
県内の大学に伝手はあるけど」

雅也「これは、あくまで僕の提案なんですけ  
ど、『学生事業部』っていう部署を作るの  
はどうでしょうか？」

真苗「学生事業部？」

雅也「取材や編集、それから配布先への配達といった『なご弁新聞』に関する業務を、『学生事業部』として学生が担当するんです。インターンとまでは言いませんけど、いろんな専門学校や大学に通う学生たちが集まる、外部サークルみたいな形でやれば、この会社にとっても、僕ら学生にとっても良い実績作りになって、お互いにウィンウィンになると思うんです。大学生の中には、紙媒体の制作に興味を持つ学生もいますし、営業志望の学生だったら配布先やスポンサーの営業練習にもなるんじゃないかと思って」

真苗「なるほど……それは良い考えね」

雅也「ありがとうございます」

真苗「今度、社員会議で桑島さんとも話し合いましたよ」

雅也「はい」

真苗「そんなすごい構想が浮かんでるなら、

一度企画書とまでは言わないけど、組織図

みたいに図面にまとめてくれるかしら？

メールで送ってくれたら、確認しておくわ」

雅也「ありがとうございます。帰ったら、早速資料作ってみます」

真苗「楽しみになってきたわね。やっぱり、

木内君はクリエイター気質があるのね」

雅也「（苦笑して）そうでしょうか」

真苗「私もね、トータルプロデューサーって形で、企業のコンサルとして、採用ツールで使うノベルティや販促物の企画を考えるでしょ。そういうアイデア勝負なところが、私も木内君にも通ずるものがあるかもしれないわね」

雅也「一年生と二年生の時、アイデアテクニクっていう授業があったんです」

真苗「アイデアテクニク？」

雅也「一枚の写真から物語を膨らませたり、連想ゲームみたいにあるお題に関して百個のキーワードを書いたり、アイデア脳を

鍛える授業なんです。その授業の先生は、

『我々クリエイターは送り手にならなきゃいけない』ってよく仰ってました。なので僕も、すっかり今じゃ電車の中吊り広告を見たら、内容よりもこの広告がどんな写真や色づかいで、どんなフォントを使ってるのかっていうふうに見るようになってちゃったんです」

真苗「送り手になるか…：本当にその通りね。私たちみたいに、アイデアで勝負しなきゃいけない仕事をしてる人にとっては、やっぱり『送り手』になることが必要よね」

雅也「学生事業部も同じだと思うんですよ。何より、主体性をもって『送り手』になるような意識をもった学生がそろえば、フリーペーパー制作もうまくいくような気がして」

真苗「そうね。楽しみになってきたわ」

雅也「（笑って）はい」

雅也が夕飯を食べている——洗い物をしている真保。

真保「学生事業部？」

雅也「そう。今日、社長に提案してみたの。

後で、簡単な企画書作る」

真保「けど、アルバイト勤務のあんたが、フリーペーパーを全部作るわけでしょ。大丈夫なの？」

雅也「だから、学生事業部っていう学生のための部署を作ろうって話をしたの。いくら、うちの学校と連携するって言っても、結局実働部隊として動くのはうち一人なわけだよ。そうになると、とてもじゃないけど荷が重いことになると思って。それに、授業だつてあるでしょ。フリーペーパーは月二回発行だから、スケジュール的に一周目で取材と記事書いて、二週目で編集と印刷業者への発注したら、もう三週目には次の号の取材と記事執筆、それで四週目に編集と業



者発注っていうスケジュールになるでしょ。学校の授業は確かに、去年と比べたらコマ数も減って時間は作りやすいかもしれないけど、それでも授業に穴は開けたくないからね。配布エリアを増やしたり、スポンサーを見つげるためには、そういうのを担当する人だって必要になる。けど、さすがにうち一人じゃそこまで手が回らないでしょ。だから、営業志望の大学生に担当してもらえば、役割分担できるじゃん」

真保「まあ、適材適所って言葉があるように、仕事には向いてるものと向いてないものがあるからね」

雅也「そうそう。だって、とてもじゃないけど営業ガツツリなんてできないもん。確かに配布をお願いすることはしたけど、さすがにお金出してくださいっていうスポンサーを見つげるのは、それなりの営業力とか戦略がないとね。まあ、専門外だから何とも言えないけど」

真保「まああなたは、書く仕事を目指すって  
いうのがあるから良いけどさ、健はどうな  
ることやら」

雅也「健は来年高三ってことは、そろそろ一  
回目の進路希望が始まる頃なんじゃない  
の？」

真保「まあそうなんだけどね。ただ、何をし  
たいのかも分からないしね。今の名古屋の  
高校だって、成績的に地元の学校にどこも  
入れなくて仕方なく決まったところじゃな  
い」

雅也「そうだった。中三でオーラーの通知表  
じゃ、このあたりの公立高校はおろか私立  
だって無理だもん。名古屋まで通うのは大  
変だけど、よくいける高校が見つかったわ」  
真保「だから、余計に心配なの」

雅也「何かやりたいような話も聞かないしね」  
真保「暇さえあればゲームしてるしね。よく  
よく考えたら、あの子が家で勉強やってる  
ところなんて見たことないわ」

雅也「勉強しろって言わなかったの？」

真保「言ってたけど、まともにやってなかったのかな。父さんがいない間、あんまり健なこと構ってあげられなかったでしょ。放置させてたわけじゃないけど、もう少し勉強面で気にしてあげれば良かった。まあ、今言ったところで遅いけど」

雅也「勉強なんて、やる気の問題だもん。今からだって、あいつにやる気にさせれば何とかなるでしょ」

真保「それでも、あの子の中で何かをやりたいてっていう目標もないようだし」

雅也「まあ進学できるような頭もないから、素直に就職かな？」

真保「学校に来た求人で、見つかるかもしれないけどね」

雅也「どういふところから求人来てるんだろ。でも、情報専門学校の高校課程ってなると、あんまり求人ないんじゃない？　ほとんどの子が、専門課程に進学するでしょ？」

真保「そうでもないみたいよ。高校課程でそのまま就職する子もいるんだって」

雅也「情報系の専門学校と言っても、検定は受験してないし、パソコンもそんなに使えないんなら、下手に専門学校行くよりかは、就職したほうが良いのか」

真保「あんたこそ、就職のほうはどうするの？」

雅也「学校に求人来ないんだよね……。自分で調べても、実績三年以上とかっていう明らかに転職する人向けの求人しかなくて」

真保「じゃあ、どうするの？」

雅也「連載だけじゃ食べていけないもんね……。でも、もっと大きい仕事取ってくる」

真保「仕事取ってくるって、フリーにでもなるの？」

雅也「それも一つの手だと思ってる。キャリアアセンターが当てにならないんだったら、自分で見つけるか、自分で独立していくしかないでしょ」

真保「もしフリーになるとしても、準備だつていろいろ大変でしょ」

雅也「それはまた調べてるし、先生たちだつてフリーランスの人が多いから、相談に乗ってもらおうかと思ってる」

真保「まあ、焦って早く変なところに決まるよりかはマシかもしれないけど、それでもちゃんと進路決めてよ。岐阜のじいちゃんたちにも、進路の報告しなきゃいけないんだから」

雅也「分かってる」

真保「母さんも、自営業の娘だから、じいちゃん姿見てきたでしょ。待ってても仕事は来ないし、仕事をどんなふうに取りつきたのかは分からないけど、それでも大変だったんじゃないかな」

雅也「……」

真保「まあ、学生事業部とか、ポートなんとかっていうのを作るのに時間かけるのは良いけど、進路のことだつてちゃんと考えな

さいよ」

雅也「はいはい」

真保「茶碗とか、流しに置きっぱで良いからね。明日、母さん洗つとくから。今日、洗濯よろしくね。風呂入ったら、そのまま寝るから（と出ていく）」

雅也「進路ねえ……」

重々しく箸を動かす雅也。

3 名古屋芸術専門学校・5階・廊下く5

03教室（数日後）

502教室から雅也が出てくる――ベンチで待っている瑞枝。

瑞枝「うっちー」

雅也「あれ、みずちゃん」

瑞枝「今、時間ある？」

雅也「うん。今日の授業はもう終わったから、もう夜まで暇だよ」

瑞枝「良かった」

雅也「何かあったの？」

と、雅也のスマホに着信が来る。

雅也「あ、ちよつとごめん。(と電話に出て)  
もしもし、お疲れ様です。はい、はい……  
本当ですか？ 分かりました、ありがとうございます  
ございます。え？ 僕が学生事業部長。ま  
あ、確かに言いだしっぺの法則ではありま  
すが……はい、大学生たちと協力して頑張  
ります。はい、次は木曜日のお昼から出社  
します。はい、ではよろしくお願いします。

(と電話を切る)

瑞枝「学生事業部って、何？」

雅也「ああ、連載やってるフリーペーパーあ  
ったでしょ。あれ作ってる担当の人が退職  
することになってね、それで俺が引き継ぐ  
ことになったんだけど、営業とかスポンサ  
ー集めとかの開拓まではできないでしょ。  
だから、『学生事業部』っていう学生の部  
署を作って、学生サークルみたいな感じで  
やろうって提案したの」

瑞枝「相変わらず、うちーの頭の中は不思

議な構造してるわ」

雅也「そんなことないって。あ……：そういうえ  
ば、みずちゃん何か俺に用があったんだっ  
け？」

瑞枝「そうそう。実はさ、今CGの制作会社  
の会社説明会受けることになって、急ぎよ  
ポートフォリオ進めなきゃいけなくなった  
の。401教室は、今授業中だからカッテ  
イング作業とか邪魔になると思って、今5  
03教室で作業してたんだけど、うっちー、  
ポートフォリオ見てくれない？」

雅也「うん、良いよ」

瑞枝「ありがとう」  
と、503教室に入る——雪奈が、カ  
ッティング作業をしている。

雅也「あら、ゆきちゃんもいたんだ」

雪奈「ああ、お疲れ。うっちー」

瑞枝「うっちーに、ポートフォリオ見てもら  
おうと思って」

雪奈「文章のところ見てもらったら？」



瑞枝「ああ、そうだね」

雪奈「うちーは、もうポートフォリオできたの？」

雅也「試行錯誤の上に、ようやくね。鈴木先生にも添削してもらって」

と、鞆から雅也が表紙に映る『Tree In』という小冊子を取り出す。

瑞枝「すごっ。『Tree In』って、木内ってことね」

雅也「本を作るスキルも出せると思って、結果的にこうなった。中は自己紹介風のエッセイト、作品のまとめと、講師の先生のコラム載せたの」

雪奈「(冊子を見て)へえ、『講師陣から見た木内雅也』かぁ。随分、講師の先生を贅沢に使ったんだね」

雅也「うん。先生方に全面協力していただいて、ようやくできた」

瑞枝「これなら、インパクトあって仕事に繋がるんじゃない」

雅也「そうだと良いんだけど。あ、みずちやんのポートフォリオ、これ？」

瑞枝「うん。お願いします（とファイルを渡す）」

雅也、ファイルを一ページずつ見ていく——見守るように見ている瑞枝。

雅也「説明文のところさ、『です』とか『ます』になってるところと、『だ』で終わってるところあるじゃん」

瑞枝「あ、本当だ」

雅也「文末の文体は揃えたほうが良いかも。基本的に、最初に使ってるほうに合わせるのが原則だから、もしみずちゃんの中で意図が特にないんだったら、文体は全部『です・ます』に統一したほうが良いかも。そのほうが、文章が柔らかくなるから」

瑞枝「春休みのポートフォリオ講座から、結構直しちゃったんだよね。あの時も、うちーから『一文が長い』って付箋でコメントもらったの思い出したわ」

雅也「（ポートフォリオを見ながら）確かに、みずちゃんの説明文は一文が長いね。これだと、一つの文章の中で何が伝えたいのかわからなくなるから、要点ごとに文章は分けたほうが良いかも。自分では分かっても、他の人が読んだら案外理解するのに時間かかるパターンあるから」

瑞枝「なるほどね。確かに、書いてて苦戦したもん、説明文のところ」

雪奈「（作業をしながら）やっぱり、うちーに相談するのが一番でしょ。私たちって、どうしてもデザインの視点で見ることが多いくて、文章のほうにそこまで意識してないでしょ。でも、見る人によつては、うちーみたいに細かく文章を読む人だっているんだもん。こういう時、やっぱりうちーに文章を見てもらうのが一番だよ。専門的で貴重な意見なんだから」

雅也「そんなことないよ。文章なんてね、書こうと思えば誰でも書けるんだから。至極

当然のことを言ってるつもり」

雪奈「確かに、文章は誰でも書けるかもしれないけど、人に読ませる文章を書けることとは違うでしょ」

雅也「まあ、確かに」

瑞枝「そうだよ。レポートとか感想文とか日記とか、最低限、日常生活で私たちって文章書いてるけど、うちーみたいに、一般の人にちゃんと伝わるように文章を書くこととは違うんだもん」

雅也「何か、照れるね。そうやって言われると」

瑞枝「（雅也の冊子を見ながら）このうちーが作ったポートフォリオだって、ちゃんと読者がいることを想定して、独りよがりな文章になってないもん。雑誌と一緒に、ちゃんとした読み物になってる。私も、よくファッション雑誌とか読むからさ、こうやって誰かに読ませる文章が書ける人がすごいなって思うもん」

雪奈「だから連載だつて、やらせてもらえてるんじゃないの？ 私もあのフリーペーパー見たけど、面白かったもん」

雅也「嬉しいこと言ってくれるじゃん」

瑞枝「それに、今度からは学生事業部長だもんね」

雅也「よしてよ」

雪奈「何？ 学生事業部長って」

雅也「フリーペーパーを、俺が主導で作ることになったんだよ。それで、さすがに俺だけが対応できないから、学生サークルみたいに県内の大学生や専門学生を集めて、一つの部署にしようってことになったの」

雪奈「相変わらずのご活躍じゃん。それなら、デビューが決まるのすぐなんじゃない？」

雅也「まあ、デビューさえ決まれば、キャリアセンターからうるさく言われることもないもんね」

雪菜「キャリアセンター、一方的に求人案内メールを一斉に送ってくるだけで、ちゃん

としたバックアップとかやってくれないも

んね」

雅也「まあ、それは言ってる。(と瑞枝に)

ポトフオリオに関しては、これぐらいしか言えないけど、大丈夫だった？」

瑞枝「すごく助かった。文章を見てもらうには、やっぱり文章を専門的に勉強してるうちーだね」

雅也「説明文のところ、俺が赤入れようか？」

瑞枝「入れてくれるの？」

雅也「任せといて」

瑞枝「やったー」

雅也、筆箱から赤ペンを取り出すと、瑞枝のポトフオリオの添削をしていく——感心するようにつめている瑞枝。

つづく